

<第6回 日本禁煙科学会 学術総会 (沖縄)>

【二次抄録】(第6回日本禁煙科学会学術総会 優秀演題賞受賞)

健常者における喫煙の影響は早期に始まり卒煙後長期間持続する

長内 忍¹⁾ 青木 美江²⁾ 小笠 寿之²⁾ 住吉 和弘¹⁾ 長谷部 直幸²⁾

【背景】

喫煙によって呼吸機能は経年的に低下が早まることが知られているが、禁煙後の変化については十分な検討がなされていない。

【目的】

閉塞性換気障害を有していない成人において喫煙習慣が呼吸機能に与える影響について検討する。

【方法】

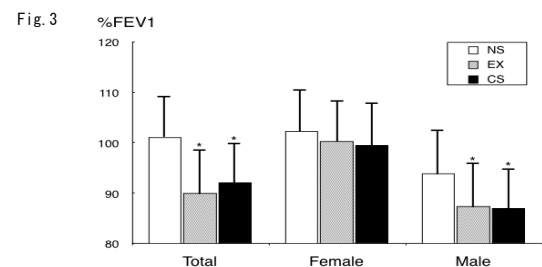
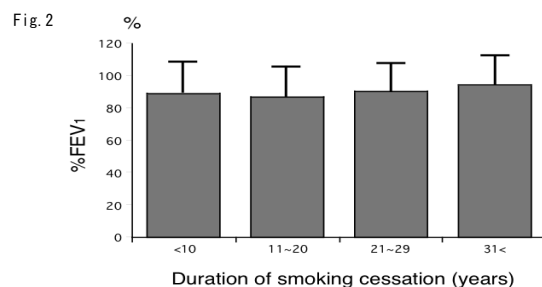
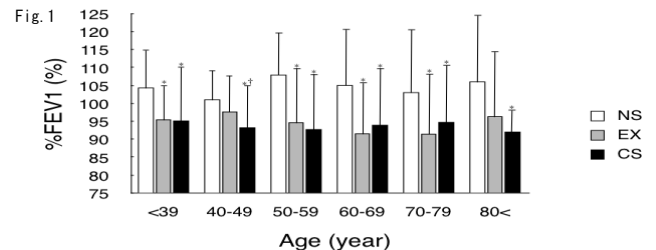
旭川市内の医療機関に受診中の呼吸器疾患を有していない外来患者1021名を対象とした。喫煙習慣に関しては質問票により調査し、スパイロメトリーによる呼吸機能検査を行った。

【結果】

1021名中113名において閉塞性換気障害を認めたため今回の検討から除外した。非喫煙者(NS)群は男性47名、女性317名。過去喫煙者(ES)群は男性204名、女性78名。現喫煙者(CS)群は男性157名、女性105名であった。

一秒量の標準値に対する実測一秒量の百分率(%FEV₁(%))はCS群92.1%、ES群90.0%で、NS群101.0%に比べ低値であった。この傾向は40歳未満の群から80歳以上の群まで全年齢層で認められ、喫煙による影響が早期から長期間持続していることが示唆された(Fig. 1)。また、ES群において%FEV₁は禁煙後増加する傾向はあるが、30年以上禁煙した群と禁煙後10年未満の群で有意な差は認められなかった。

男女別にみると、女性では三群の%FEV₁に有意な差はなかったが、男性ではCS群、ES群の%FEV₁はNS群に比べ顕著



に低値であった (Fig. 3)。

この男女差の原因について背景因子を検討したところ喫煙指数が女性よりも男性でCS群、ES群ともに二倍以上高かった。このため喫煙によって曝露した有害物質の量的な差が呼吸機能低下に強く関与することが示唆された。

【結語】

閉塞性障害を有さない成人において、喫煙の影響は壮年期以前に始まり禁煙後も長期間持続することが示された。また、呼吸機能低下の程度の規定因子として喫煙指数が重要であることが示唆された。

1) 旭川医科大学 循環呼吸医療再生フロンティア講座
2) 旭川医科大学 内科学講座
循環呼吸神経病態内科学分野

責任者連絡先: 長内 忍
〒078-8510 旭川市緑が丘東2条1丁目1番1号
旭川医科大学